

自己評価報告書

平成23年 4月 4日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520277

研究課題名（和文） ドイツ近現代文学における「神義論的思考」の変遷

研究課題名（英文） The Transition of the “Theodizee-thought” in the German modern literature

研究代表者

川中子 義勝 (KAWANAGO YOSHIKATSU)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60145274

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：神義論、予定論、修辞、批評、ハーマン

1. 研究計画の概要

(1) 本研究は広義の「神義論的思考」をドイツ近現代文学史という歴史のスパンの中で具体的に指摘し、その変遷を系譜的に跡づけていく。

(2) 一方で、宗教や伝統によって培われた比喩形象やトポス、その修辞・文体様式を整理する作業を併行して行い、それらをこの「神義論的」目的論的構図と突き合わせ、秩序づけていく。

(3) 最終的に、ドイツ近現代文学を「修辞」と「批評」という縦糸・横糸によって織り出されてゆく織物、すなわち伝統の批判・継承の深化を映す図として描き出すことを目指す。

(4) そのようにして、古典主義、ロマン主義、写実主義、自然主義という風に通常の文学史が採る固定的叙述から自由な、独自の修辞論的文学史を形作る。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究では、従来の文学史理解の枠組みを批判的に検討し、問題性を指摘しつつ、新たな枠組みを提起しようとする。作業には、先行研究をあまり参照できないので、個々の作品成立や文書記述の状況に立ち戻って、丹念に具体例を収集し、少しずつ全体像を組み上げている。

(2) 敬虔主義や覚醒運動など、近代各時代の人々が死生観や苦しみの理解を表明する際の比喩の伝統などを、文体の側面から見直した。宗教改革から19世紀に至る範囲の

神学論争なども検討しつつ、神義論的問いの兆す場を跡づけた。30年戦争時代の詩人たちを中心とする賛美歌集に収められた苦難の受容を歌う詩篇を分析したが、なかでもヨハン・レオンの「死」を中心に据えて検証し、「神義論」を思想や神学の独占概念から切り離し、文学共同体の修辞的伝統全体のなかに跡づける作業を行った。

(3) 本研究の要となる「裏返された神義論」への転換を正面に据えて、跡づけていった。18世紀後半から19世紀全般におよぶ歴史発展への楽観論を示した思想家や、初期ロマン派の詩人たちにその先駆形態を見て、彼らの著作の個々の修辞、比喩形象を一旦解体し、目的論的再神話化としてのその言説の総体を価値づけた。

(4) 文献を参照するための出張調査を行い、レーゲンスブルク大学の図書館、人文科学図書館において、その方面の資料収集にあたった。滞在時に同大学のガイェック教授と打合せを行い、研究のさらなる進展を目指した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

これまでの到達点までを、中間段階のまとめとしてすでに発表した。研究協力者であるベルンハルト・ガイェック教授との共同研究の一部はすでに『神への問い——ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方』として、また自らの考察は『詩人イエス——ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』として昨年までに公にしたが、その業績は、一般読書界において高く評価され、前者は、

第10回日本詩人クラブ詩界賞（2010年）を受賞した（詩に関する評論部門の賞）。

4. 今後の研究の推進方策

(1) これまでの作業を本年度も継続し、その最終段階まで導いてゆく。修辞的伝統の系譜的研究が単なる懐古的叙述にとどまらないために、現代の表現の問題に関しても積極的な意義付けを行い、そこに先立つ時代と共通する比喩形象の提示を確認中である。本来、希望の形象化である「予型論」が「神義論的思考」の変遷という時代の展開の中でも、死生観に関わる重要な比喩形象に留まることを取り上げてきた。近代初期から現代へと、伝統の批判や継承において文体や修辞の果たしてきた役割を広く民衆に関わる様々な文献を俯瞰しつつ明示することを、この年度も主要な作業とし、その本研究における全体像を明らかにする。

(2) これまでの調査・考察をまとめ、それらを報告書として印刷・刊行できるまでにする。そのために、上に記した友人のガイェック教授他、関連分野の研究者と討議、意見交換を重ねる。本研究で行った作業方法で達成した部分と、発展的に開かれた展望を統一的視点により把握する。

その際に「詩言語における人称の問題」、ことに「二人称的発語の意義づけの問題」が新たに不可欠な分析要件として認識されるに至っている。これをこの研究の枠内でまとめうるか、詳細に検討する必要があるが生じている。

(3) 「予型論」「神義論的思考」「二人称的発語」とを結んだ、最終的な到達点を『聖書詩学』（仮題）の表題のもと、書物に著すことを目指す。そのようにして、修辞論・文体論からのドイツ文学の今後の研究のために、重要な基礎を提供することを意図している。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 川中子義勝、「矢内原忠雄と教養学部」、東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』、pp.116-132、2010、査読有。
- ② 川中子義勝、比喩形象 figura について、「ERA」4号、pp.117-119、2010、査読無。
- ③ 川中子義勝、譬えと予型 - 二人称の詩学、「ERA」2号、pp.92-102、2009、

査読無。

- ④ 川中子義勝、J. G. ハーマンにおける「霊」（"Geist" bei Johann Georg Hamann. Daimon - Genius - Genie）、「ドイツ文学」138号、pp.91-107、2009年、査読有。
- ⑤ 川中子義勝、ドイツ宗教詩と世俗化の問題 - 信仰の歌と問いかける詩、「説教」10号、pp.47-66、2009、査読無。

〔学会発表〕（計2件）

- ① 川中子義勝、日本詩人クラブ例会講演、「問いと呼びかけ - 宮沢賢治に触れつつ」2010年9月11日、東京大学駒場ファカルティハウス。
- ② 川中子義勝、白百合女子大学キリスト教文化研究所主催講演会、招待講演「バッハの音楽に見る生と死 - 〈神の時は最良の時 BWV 106〉」、2009年11月10日。

〔図書〕（計3件）

- ① 川中子義勝、『詩人イエス - ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』、教文館、2010、240p。
- ② 川中子義勝／ベルンハルト・ガイェック、『神への問い - ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方』、土曜美術社出版販売、2009、282p。
- ③ 川中子義勝／中村不二夫、『詩学入門』、土曜美術社出版販売、2008、451p。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕ホームページ

<http://www004.upp.so-net.ne.jp/kawanago/DTTOP.HTM>